

神鍋のウスバシロチョウの食草

足立義弘

これまで約3年間にわたって行ってきた、神鍋のウスバシロチョウの分布調査はひとまず終了し、今年からは、今までの結果を基に、ウスバシロチョウの生活史と、環境に重点をおいて調べることにした。ところが今年(1984)は、大雪による春の遅れと、計画の不行き届きのために、具体的な調査を行うことができなかった。しかしながら今までの懸案であった、神鍋のウスバシロチョウの食草を確認したので、以下にその報告をする。

神鍋では、今まで、成虫の時期にかぎって調査を行ってきた、このため、ウスバシロチョウの食草(食草の摂食)を確認していなかった。しかし、神鍋での食草は、ムラサキケマンであろうと考えていた。というのは、成虫の時期には、いたる所でムラサキケマンを確認しており(足立, 1983)、他にウスバシロチョウの食草とされる植物は確認していなかったからである。

実際に調べてみると幼虫は5カ所で確認したが、食草はこのうち4カ所で、予想通りムラサキケマンを食べていた。ところがもう1カ所では、なんとヤマエンゴサクを食べていた。神鍋では、ウスバシロチョウは2種類の植物を食べていたのである。

食草を確認した場所は、5月1日に山ノ宮、太田神鍋、名色のそれぞれ1カ所で、5月7日に栗栖野と名色(5月1日とは別の所)で1カ所ずつである。5月7日の名色でヤマエンゴサクを食べていた以外はムラサキケマンを食べていた。

ところで、成虫の時期には、なぜムラサキケマンばかりで、ヤマエンゴサクが見付からなかったのだろうか。名色のヤマエンゴサクを引き続き調べてみると、次のとおりであった。

- 5月7日 50-60 m²の面積に群落をなしており、花期の真最中。周りの草丈(なおヤマエンゴサクの丈は、10-15cm くらいまでで、これ以上になることは、あまりない)は、10-15cm。
- 5月20日 ヤマエンゴサクの花はなくなり、日当りのよい所から黄色く枯れはじめている。また他の植物に隠れ、見付けにくくなっていた。周りの草丈は20-25cm。
- 5月31日 ヤマエンゴサクはまったく見られなかった。草丈は30-40cm。ウスバシロチョウの成虫を確認。
- 7月31日 草丈100-130cm (参考までに)。

この結果からすると、ウスバシロチョウの成虫が発生するころには(今年は20日ほど遅れていた)、ヤマエンゴサクは枯れてしまっていたようだ(ただし地上部のみ)。仮に枯れていなくても、丈が10-15cm しかないヤマエンゴサクは、周りの丈の高い植物に隠れ見付けにくくなっていたはずである。したがって、ウスバシロチョウの成虫の時期には、ヤマエンゴサクは見付けられなかったのである。

以上、初歩的な事柄であるが、“事実を確認する”ということの重要性を、あらためて認識させられた結果となった。今後さらに調べていく予定であるが、調査の協力と、データの提供をお願いしたい。

大屋町加保坂でカツラネクイハムシを採集

足立義弘

1981年6月5日、大屋町加保坂の湿地でネクイハムシの1種を採集した。のちに大阪市立自然史博物館の宮武頼夫先生にみていただいたところ、カツラネクイハムシ *Donacia katsurai* Kimotoであった。博物館へ何頭か寄贈したのをのぞくと現在6頭の標本を保持しているので報告しておく。

ネクイハムシ類は鞘翅目、食葉群、ハムシ科、ネクイハムシ亜科に属する小型(4.5-10cm)の甲虫である。生態は、卵を水草の葉裏に産み、幼虫は水草の茎または根を土中で食べて成長、根元に繭をつむいで蛹となる。幼虫と蛹は第8節にある鉤状の気門を植物組織にさしこみ呼吸する。羽化した成虫は春から水面にでて、スゲ類の花や各種の挺水植物、浮葉植物の葉をかじり、交尾する。このような生活からネクイハムシ類は死後、生活場所の近くで堆積物中に埋没する機会が多いと推定される。そして日本各地の第四紀の泥炭質堆積物に昆虫化石としてひろく見られるようで、野尻湖発掘調査団昆虫グループによって、古環境の推定のために化石、現存種ともに調査されている。

カツラネクイハムシは、1980年に同グループの桂孝次郎氏によって発見された。分布は、同氏によると、九州と、本州では中国地方から近畿を経て岐阜県あたりまで記録されているとのことである。ただし種については再検討を要するらしい。

参考文献

野尻湖昆虫グループ、1980. ネクイハムシ類の検索づくりとそれにもとづく第2回陸上発掘でえられた化石の同定、野尻湖専門別グループ発表会資料集：67-87

野尻湖昆虫グループ、1981. 日本産ネクイハムシ亜科に関する研究、大阪市立自然史博物館研究報告第34号：27-46



カツラネクイハムシ
(加保坂産)